

資料紹介

お か み じ ん じ ゃ ほう の う え ま 意賀美神社奉納絵馬 —明治の記憶—

意賀美神社に奉納された大絵馬で、当資料館に平成 13 年に寄贈された。額縁には、「明治 卅 四年拾月当町氏子中」「発起人 井上与三松 川野佐平 小林大吉 岩田与八 三木栄太郎 系川治良吉 天目伊之助 世話掛 伊加賀若中」「額瀧 大西熊次郎筆」「大阪御堂筋 稲垣製」と朱書されており、明治 34 年(1901)10 月に、伊加賀村の若中(蒲団太鼓の担い手となる若者のグループ)を世話人として、氏子が奉納したものである。製作は大阪船場の南本町にあった稲垣という絵馬屋であるが(※1)、現実の風景に忠実であることから、地元の人によって描かれた下絵をもとに作成されたものであろう。

絵馬には枚方の町が描かれ、明治 43 年の京阪電車開通前の江戸時代の面影を残した景観をうかがうことができ、貴重である。意賀美神社には、明治 42 年に須賀神社(三矢村・枚方村鎮守)と日吉神社(岡村・岡新町村鎮守)が合祀され、境内も万年寺山(旧須賀神社社地)に遷座したが、絵馬奉納の当時は伊加賀村・泥町村のみの鎮守であった。そのため、上部に大きく描かれた「意賀美神社」を頂点として、「伊加賀村」「伊加賀村堤町」「泥町村」が参詣者の往来する里道によって三角状に結ばれるという、氏神への信心を象徴的に表現した構図となっている。各要素の位置関係には大胆なデフォルメがみられるが、時代の象徴ともいべき蒸気船、氏神鳥居前のガス灯、辻の石灯籠や種字塔、そして 16 年前に大阪平野を襲った伊加賀切れの「明治十八年洪水記念碑」、決壊跡に残った沼地など、当時の人々の心象に深く刻みこまれた事物が描き込まれており、時代の指標として興味深い。

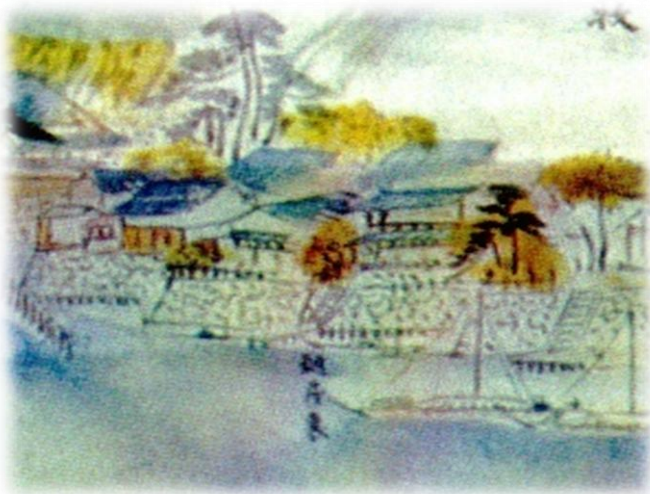
さて、画面下方には京街道と淀川が横切り、往還筋には「伊加賀村堤町」の家並みが描かれる。堤町は、17 世紀末に三矢村と伊加賀村の飛び地として造成された土地で、両村の堤町は街道を挟んで向かい合うが、手前川側にあるはずの三矢村堤町の家並みが省略されている。そのため、唯一川側に描かれるのは、瓦葺二階建ての豪壮な建物が一軒だけである。蒸気船

や苜茸きの手漕ぎ船が接近するように描かれる、この建物は何であろうか。

すぐに思い浮かぶのは、現在、当資料館となっている料理旅館^{かぎや}「鍵屋」であろう。三矢村堤町の西端にあった鍵屋は、明治時代には格式の高い料理旅館となっていたが、江戸・明治時代の枚方を描いた絵画に鍵屋を特定できるものはほとんどない。唯一、明治元年の大水害に際し作成された「明治元年五月淀川唐崎堤決潰図(以下「決潰図」)」は、画中に「鍵屋裏」と注記があるため、ほぼ位置を確定できる希少な資料である。絵馬に描かれた建物は、この「決潰図」に描かれた「鍵屋裏」前の建物と類似する。両図とも東西に二棟が並び、西棟は屋根の平側を、東棟は妻側を淀川に向け、西棟の西隣には川岸に降りるための石段が描かれている。しかし、「決潰図」では二棟とも石垣の上に建つものに対して、絵馬では西棟にのみ石垣があり、東棟には板張の高床が設けられる。正面に設けられた出入口には階段と川にのびた栈橋がみえ、床下の川面から直接屋内に上がる構造になっているようだ。折しも男が栈橋を渡っているが、前を行く蒸気船からの乗降客であろうか。

堤町にはほかにも旅館があったが、残された乗船料請求書から、明治30年代の鍵屋が蒸気船の貨客取扱所をしていたことがわかっている。また、「決潰図」との類似から、この建物が鍵屋である可能性は大きい。風景全体のなかで建物と蒸気船がしめる存在感は大きく、附近の繁栄を代表する風物と考えられていたのであろう。深刻な被害をもたらした大水害の記憶とともに、町の繁栄の象徴を描くことで、治水や地域発展への切なる願いがこめられたものであろう。

※1…『平成 17 年貝塚市郷土資料展示室企画展3図録 貝塚市内の神社と絵馬』(貝塚市教育委員会編)に、御堂筋南本町稻垣製の絵馬2点が掲載されている。



『明治元年五月淀川唐崎堤決潰図』

「鍵屋裏」部分拡大



『明治34年意賀美神社奉納絵馬』

建物・蒸気船部分拡大

(『枚方市史』第四巻巻頭口絵より転載 原本は個人蔵)

泥町村の家並み

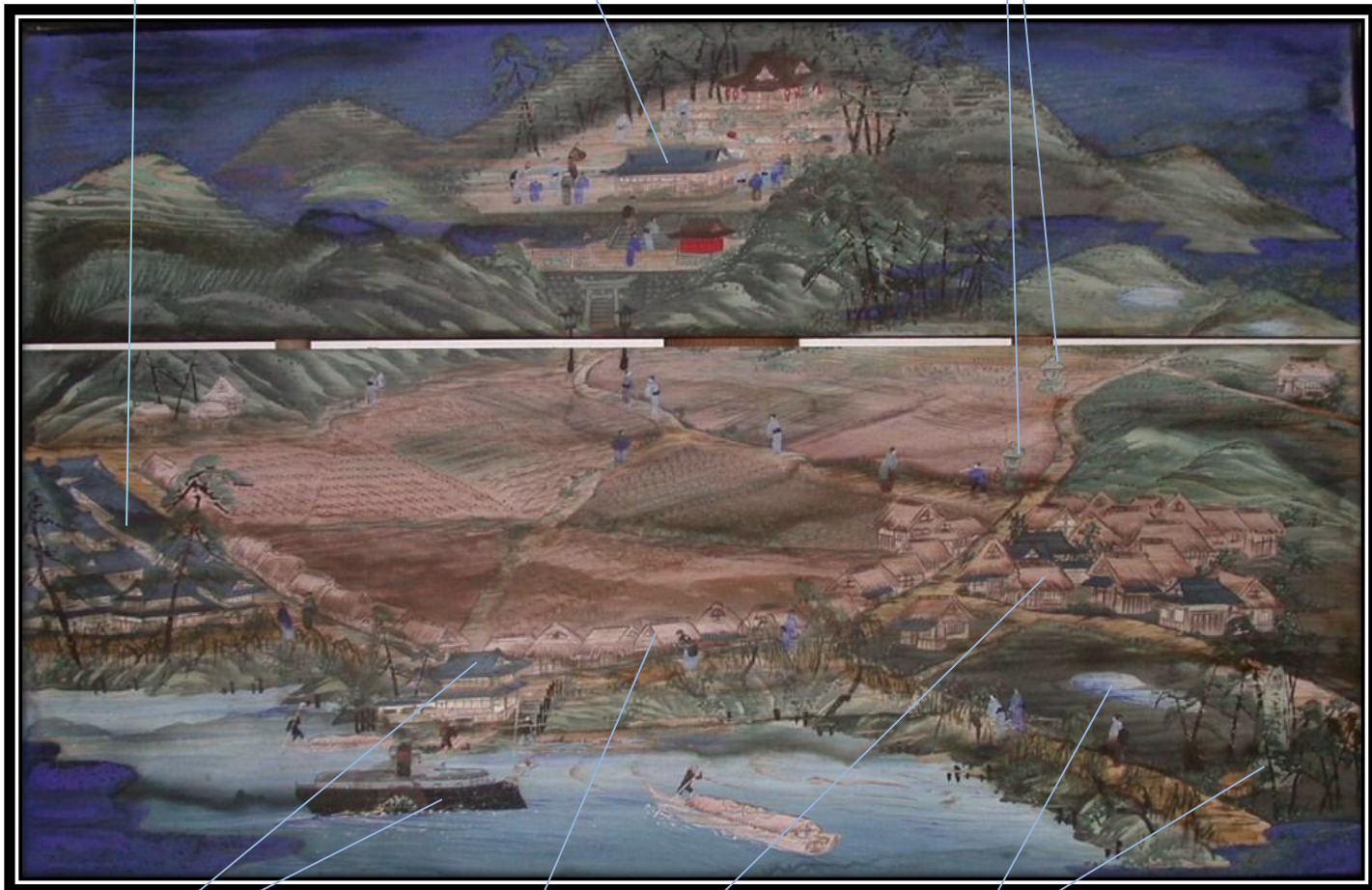
江戸時代には過書船・伏見船の船番所や船問屋が置かれ、隣村三矢とともに枚方宿の中心をなしていた。瓦葺の町場的景観をみせている。

意賀美神社

伊加賀村と泥町村の氏神。明治42年の神社合祀で万年寺山に遷座したため、旧境内の様子を伝えて貴重。本殿・拝殿・手水舎ほか、鳥居前にガス灯がある。

辻の石灯笼と種字塔

伊加賀村から意賀美神社に向かう道の辻には常夜灯が置かれており、氏神参詣道とみなされていたようだ。伊加賀道のすこし先にある種字塔とともに、現在はなくなっている。



二階建ての屋敷と蒸気船

ひときわ立派で目を引くこの建物は、おそらく旅館「鍵屋」。西側の棟は、板塀をめぐらせた高床に入口を設けており、淀川から直接屋敷内にあがれる構造となっていた。蒸気船が接近して描かれる。

明治十八年洪水記念碑 と沼地

淀川河川事務所枚方出張所の敷地に現存。実際の碑文は「明治十八季洪水碑」。この場所は、明治18年の伊加賀切れの後、水が引かぬまま沼地となり、戦後まで池が残されていた。

伊加賀村の家並み

ほとんどが入母屋草葺屋根。江戸時代と変わらぬ葺き下ろしの民家が多いが、瓦葺きの軒庇を出している家もある。誓願寺の土塀と本堂もみえる。



←現在の石碑

展示によせて

広重の種本

—風景画にもモデルあり—

右の二つの絵を見比べてみてください。淀川三十石船と、それにこぎよせる煮売茶舟(くらわんか舟)が描かれていますが、全体の構図、人物の姿勢、道具の配置など、実によく似ています。とくに力強く櫓をかまえる船頭のポーズなどは、うりふたつです。上の絵は、歌川広重の「京都名所之内 淀川」(天保5年/1834年)、下の絵は『都名所図会』(安永9年/1780年)の挿絵です。

歌川広重は、江戸後期に風景画の第一人者として人気を集めた浮世絵師です。その作品は、豊かな抒情性と構図の斬新さで評価されていますが、「模倣」が多いことも指摘されてきました。代表作である「東海道五拾三次」(天保4・5年/1833・34年)も、『東海道名所図会』(寛政9年/1797)の挿絵から多くのモチーフを拝借しています。このことは、「剽窃(盗作のこと)」などの語で表現されることもありますが、あまり否定的な見方はされていません。

なぜなら、全国津々浦々の風景画を手がける人気作家が、毎回現地で写生できるわけではなく、自然と何らかの「参考資料」にもとづいた作画がおこなわれることとなります。現在、私たちが写真や図鑑をモデルとして絵を描くのと変わらない感覚で、「図会」などの地誌類が参照されたのではないかと推測されているからです。広重の種本利用に対する価値付けはさまざまですが、種本と見比べて鑑賞することで、絵師によるアレンジの足跡がうかがえ、興味深いものです。



お知らせ

『広重展』のご案内

市立枚方宿鍵屋資料館では、10月15日(水)から11月7日(月)まで「広重展」を開催いたします。江戸時代後期、庶民の旅が盛んになるにしたがって、「旅」をテーマにした芸術や文芸が開花しました。それまで美人画や役者絵が主流であった浮世絵の世界でも、風景画という新たなジャンルが生まれ、葛飾北斎や歌川広重などの人気作家が活躍しました。

展覧会では、上に掲載した歌川広重の「京都名所之内 淀川」や「東海道五拾三次」の復刻版画 55 枚とともに、これらのモデルともなった『都名所図会』『伊勢参宮名所図会』などの地誌類を展示し、江戸時代の旅に思いをはせます。